

「おれは福島で考えた」 2000年国際関係学部卒 鈴木 孝山人

福島での東北応援ツアー。原発事故の爪痕を、現地に歩いて、見てきた。現地で直接関わっている人達から、直接話を聞いた。

これまでに、原発に関わる報道をテレビ新聞等で見聞き、自分なりに感じ、考えたものもあったが、やはりどこか他人事だった。

それが、今回のツアーで、変わった。ゴーストタウンと化した浪江町。一見、街並みに異常なし。が、家建物がふつうにあるのに、車と人が皆無。家々はすべてカーテン・雨戸が閉まっている。会社事務所、出入り口の扉にあるガラス窓の一部は、空き巣により割られている。庭のさるすべりの枝には「残してください」と書かれた残置テープがある。公園や空き地には、空間放射線量計。そんな浪江町を、この足で歩いて、この目を見た経験が、自分は「原発と共にこの国に生きている」のだということを、理屈ではなく、実感として分かせてくれた。そのように、「(一時的であったとしても)棄てられた町」を、カラダで感じて、心に湧いた言葉が……

「自分が住んでいる町じゃなくてよかった」

これが、偽らざる本音。素直な感情。関東で生活している東電の人間も、東京で暮らしている市井の人々も、どこに住んでいる誰だろうと、そう思わない人がいるのだろうか？

1か0かで言う。東電の対応は最低だ。事故後も何ら変わることなく、かつて福島原発の電力で無事安泰に楽しく生活していた関東の人間には腹が立つ。確かに福島では原発によって受けた恩恵もあった。しかし、このような状況を作った源は、国の施策だ。また、事故後の情報開示と避難指示は、能無しの最低だ。だが、もっと問題なことがある。こんな状況に至るまで、ほとんど疑問を感じることなく大事なことは何も知らず呑気に生きてきた自らの無知。

知らずに生きている。それは恥ずべきことである以上に、害悪で、罪なことだ。今回、現地を訪問して思うこと……皆、福島に行くべきである。

(了)